

地理



津東高校
(三重・県立)
林 仁大先生

教員歴26年目。三重県出身。名張高校、津高校を経て2015年より現職。これまで、産業社会と人間のカリキュラムづくりやSSHなど、キャリア教育の企画運営などを実践。キャリア教育、探究活動、授業を密接に関連付ける取組を行っている。



学力と人間力の両輪をもって

社会貢献できる人材になってほしい

↓ 自身をメタ認知し、知識活用力を育てる授業

生徒の課題・育成したい力

自分の可能性を信じて
主体的に前に進む力をつける

林 仁大先生は地理教員として授業を行うなかで、「社会科は暗記科目」と捉えている生徒が多いことが気になっていた。

「確かに社会科は他教科に比べて思考するにも基礎的な知識が必要な教科ではあります。しかし前任校時代に、難関大学を志望する生徒が、知識はあるのに論述が書けないことを目の当たりにして、知識と知識、点と点をつなげることができていないと思われきました。探究学習などは教科横断と言っているのに、教科どころか単元ごとでしか頭に入っていないのでは」と

論述するには、もっている知識をつけて自分なりの意見を表現するという「知識の活用」が求められる。それが生徒たちには不足していると感じていた。さらに津東高校に着任後は、生徒た

ちに「主体性」や「チャレンジ精神」をもつてほしいと感じるようになった。

「素直でいい子たちばかりで、私から見ると潜在能力が高いのですが、現状の居心地の良さに満足して、自分にはもつと可能性があるという発想がない。しんどい思いをしてまで殻を破りたくない」と

授業デザインへの落とし込み

生徒に問い続けることで
知識を結びつけるようになる

生徒たちにチャレンジ精神や主体的な学びを育むために、林先生は「とにかくいろいろな経験を積ませて自信をもたせてあげたい」と語る。

「私は4月の初めの授業ガイダンスで、地理の授業で養う力は『学力』『学ぶ

い」と思っているかのように見えます」

林先生は社会科を通して多文化共生や他者を敬う気持ちを育み、学力と人間力を両輪として社会貢献できる人間になってほしいと考えている。人の役に立つ人材になるためには、生徒たちの自己肯定感を高め、他者に自ら働きかけ、自分の可能性を信じてチャレンジする主体性が必要だ。それを地理の授業の中でどう身につけていくか、日々実践しながらも常に考え続けているという。

力』『考える力』『学び合う力』だと伝えていきます。生徒たちは当初は『学力』以外はピンと来ていないようですが、授業の中で小さな積み重ねを取り入れていきます」

生徒たちに伝えているねらいに加え、



【単元を通したデザイン】

科目・単元名

地理(2学年)
世界の気候

教材

教科書、資料集、
ワーク用副教材、地図帳

単元の目標

気候の成り立ちのメカニズムと世界の気候区分を知り、それぞれの特徴を把握することによって、その気候の景観や人々の生活などの様子について、現実的に思い浮かべることができるようにする。資料を分析する基礎力をつくる。

●単元の流れ(全10時間 50分×10コマ)

1~3時間目 (気候の成り立ちの理解)

前回授業の復習

ワーク用の副教材を使って、前回の授業で学んだことの確認

気候の概論について学ぶ

気候に影響を与える要素について、気温や降水量、植生などのメカニズムから自分で考えられるように学ぶ

学んだことの問いを考える

同じ熱帯の中で景観の違いが生じる理由などをグループで考える

4~10時間目 (世界の気候区分の理解)

前回授業の復習

ワーク用の副教材を使って、前回の授業で学んだことの確認

この日に新しく学ぶ気候区分について、気候の概論で学んだ知識をもとに考察

特定の気候区分の特徴を、単元の前半の概論で学んだ知識や、他教科で学んだ知識を基に、自分たちで考えられるようグループワークで考察する

学んだ気候区分の地域を自分事化する

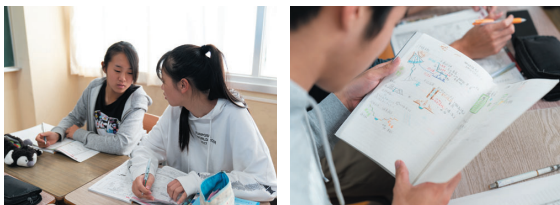
学んだ気候区分の中で行きたい国、住みたい国についてスマホで調べて考え、理由などをグループで共有する

他教科・他科目との関連付けや、特別活動を含めた学校活動全体で活かせる力も意識している。
例えば、林先生の授業はグループ学習が多い。講義型の説明の場合でも細

【授業実践のポイント】

取材時の授業は上記の単元の5時間目にあたる。気候区分の概論を頭に入れたうえで、前回授業の熱帯との違いを意識しながら今回授業の乾燥帯気候の特徴について、メカニズムから考察。さらに異国の暮らしを自分事化する。

●復習の発問で知識の定着を図る



ワーク用の副教材で復習する際に、今までの授業で学んだ知識をどう使えばよいか、気候のメカニズムを思い起こす発問を投げかける。

●他教科からの学びも含めて、気候について考える



新しく学ぶ気候区分の特徴を把握するために、過去に学んだ知識や資料やグラフの読み解き方、他教科で学んだことなど、知識を関連付けて活用できるようにする。

●知識と知識の関連付けから、自分との関連付けへ

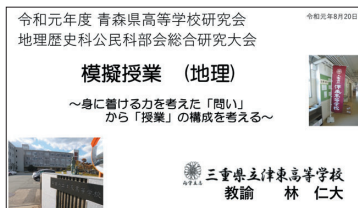


学んだ気候区分に属する具体的な南国や地域についてさらに詳細な情報を収集し、「行きたい国、住みたい国」を考えることから、異国の暮らしと自分の興味を関連付ける。

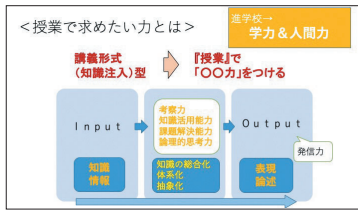
かな問いを織りまぜて、まず個人で考えてからグループで話し合う。自分の考えを他者との話し合いでメタ認知して、自分と他者を相対化する。
「生徒によってはクラスメートでも話したことがない相手もいます。授業のグループ活動で話すようになれば、学校行事などでも活きてきます」
また、問いは単語ではなく文章で答えるような内容を心掛けたら、答えに対して「なぜそう思った?」と繰り返し問いかけることで、理由や根拠を提示することも訓練している。

こうした問いを発し続け、仲間と共に考えていく授業を続けていくことで、生徒たちは地理を暗記科目ではなく、メカニズムや根拠から自分で考えを導きだす学びだと理解し始めるという。
「問いについては大きく分けて①地理の授業で習った復習の問い、②他教科・他科目や中学で習ったことからの問い、③答えがつかない問いの、3つを意識しています。グループで考えて仲間の意見を聞くことで自己のメタ認知にもつながります」
取材当日はケッペンの気候区分の熱帯と乾燥帯についての授業だったが、①や②の問いでは、単元の前半で学んだ気候の概要や、理理的な知識が必要とされる問いが出されていた。

生徒が理解していきます」
さらに、熱帯や乾燥帯など、日本とは離れた地域の気候の場合、いくらメカニズムから学んでも生徒が自分事として興味をもって捉えることは難しい。そこでこの日は③の問いとして「熱帯や乾燥帯で、もし行くとしたらどこに行きたい?」について、まず旅行気分ですり合った。その後には「10年間住むとしたら?」と、その国の詳細情報や自分の志向がわからないと答えられない問いへと発展させていく。必要な情報をスマホや資料集を活用して調べて、なぜその場所なのか、自分なりの答えを導き出していく。グループ内で発表し、仲間の考えを聴くことで、自分や今住んでいる場所についても見つめ直すきっかけとなる。



林先生自身が外部の研究会で講演することもある。自身が実践している授業の導入や発問の例を挙げながら、地理をキャリア教育にするためのポイントを伝えている。



グループ学習にも主体的に考えることにも慣れていかなかった生徒たちは、先生の授業を受け始めた当初は班をつくつてもなかなか話すことがなかった。そうだが、この日の授業では先生が問いを出すと今までに自分が書いてきたノートのメモを見返して話し合ったり、お互いの知識を合わせながらみんなで答えを導き出そうとしていく姿が見られた。林先生が調査ことに実施している生徒自身の振り返り(下図)でも、受け身から積極的に仲間と主体的に学ぶことで自信がついていたり、知識の関連付けで理解が深まる様子が見えてくる。

「少しずつではあります、答えが一つではない問いを出したときに、こちらの意図を理解して自分なりの答えを考

生徒の変容・成長

仲間と共に、主体的に取り組み 自信をつけ始めた生徒たち

えようとする生徒の姿に、手応えを感じます。自分との関連付けの問いなどは『受験に出ないのに』と思っている生徒も今はいるかもしれませんが、探究活動に取り組みるときや進路の志望動機などを考えるときに『林の言っていたのはこういうことやったんや』と思ってくれればいいと考えています」

授業デザインの磨き方

自分発信&他者からの学びで 新しい科目にも対応していきたい

林先生は今までに、外部の研修会などに積極的に出かけて、全国の先生たちのさまざまな授業アイデアを吸収している。また、他教科・他科目の教材にも常に目を通して。きっかけは、前任校でキャリア教育を推進していた管理職との出会いだ。

「外部の勉強会にいろいろ連れて行ってもらって、教科のおもしろさを生徒に伝えるだけでなく、生徒自身が俯瞰して自身を見る力を授業でも養わなければいけないと気づいたので」

進路担当だったときに、キャリア教育のイベントなどを多数企画してきたが、それが単発で終わってしまい、人間

< 生徒の声 >

生徒たちの振り返り

- 以前よりも過去に勉強したことと関連付けて学習しました。グループ学習では、間違えてもいいからとにかく思いついたことを発言して話し合いをしました。まだまだ知識が足りないのもっと学習してより良い発言ができるようにしたいです。
- 受け身でなく主体的に取り組めたと思う。グループ学習も、誰かが何もすることがない状況ではなく、協力して問題の解決に取り組めた。
- 授業に主体的に取り組んだら、模試の点数も上がり、人に説明することは、自分の理解も深まり相手の学力向上にもつながりとてもいいことだと思ったので、これからはがんばっていきます。
- 班学習では、先生の出した問題をわかる人がいたらその人が発言して教えてくれたし、自分も教えることができた。わからない問題はみんな積極的に教科書などを使ったりして調べた。自分で考えてわかった問題は身につくと思った。
- 3年になって初めて林先生の授業を受けて、地理の班活動が1学期は慣れずに発言も少なかったが、2学期になってだんだん自分からも積極的に発言できるようになり、班の皆の力で上げていけるなと思うと同時に、班活動の大切さが改めてわかった。
- 積極的に班内で情報を共有しました。穴抜きされているところだけでなく、プラスアルファで地形や生産物を確認し合ったり、英語が出てきたらどういう意味があるのか調べるなどしました。

力の形成と学力の向上など、生徒の中にある知識と経験との結びつきに隔たりがあると感じていたところだった。

「それで、アクティブラーニング型の授業を取り入れ、答えのない問いを生徒に考えさせることで、授業の中で生徒のキャリア形成を試み始めました」

以後、その上司の先生がつくった学校を超えた有志の勉強会「三重県若手進路研究会」に参加し、現在は会長を務めている。長期休暇の時期に集まって、授業実践をしたり、最新の学びについての情報共有をする場だ。林先生自身も他県の研修会などに講師として赴くこともある。

「一人ではなかなか新しい発想が出てきません。地理を通して社会貢献できる人材や多文化共生の心を身につけさせるために、他県や世界で起きていることを『生徒に自分事化させる発問』が必要。言うは易いですが、実際に考えると教員は真面目なので、生徒が興味を引くような発問のアイデアがなかなか浮かばないものです。だからこそ、自分からも発信し、人のアイデアからも学ぶことで、授業をもっと進化させていきたい」

学習指導要領の改訂で「地理総合」になると、教員自身もさらに新しい学びの必要性に迫られる。

「専門教員が少ない科目なので、他科目や他校の先生とも切磋琢磨できるチャンスだと考えています。目の前の生徒にさらにフィットする授業をしていくためにも、自分自身のスキルをさらに上げていかねばと思っています」